

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370418

研究課題名(和文) 浙江金華口承文藝研究 語りもの藝能「金華道情」を中心に

研究課題名(英文) A STUDY ON ORAL LITERATURE OF JINHUA, ZHEJIANG, CHINA: MAINLY FOCUS ON JINHUA-DAOQING

研究代表者

松家 裕子 (MATSUKA, YUKO)

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：20215396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本グループは、口承文藝の研究によって中国文化史理解の深化に貢献することをめざし、2008年度以来、宝巻を中心に中国近世以来の語りもの研究を行ってきた。テキストの読解を行なう一方、テキストをとりまく状況を知るため、浙江省における実地調査を研究の柱としている。

本研究では、主たる調査拠点を金華に定め、語りもの「金華道情」について、実演の観察、藝人への聞き取りとテキストの翻訳を行なった。その結果、主に盲目の藝人が担ってきたこの藝能に、文字というフィルターを通しては見えにくい中国基層の文化の特徴を見出すことができた。

本研究期間中には、また宝巻や浙江の蚕歌について研究成果を公表した。

研究成果の概要(英文)： Since 2008, our group has been researching early modern and modern oral literature that consists of singing and talking at Zhejiang 浙江, China. In this term we did fieldwork mainly at Jinhua 金華. Jinhua has a famous oral entertainment Jinhua-daoqing 金華道情. We observed the performance of the representative entertainer and interviewed him. We also translated some works of Jinhua-daoqing into Japanese.

Because most of the entertainer of Jinhua-daoqing has been blind, it is no doubt that almost all the text has been passed down only by mouth. Actually through the text of Jinhua-daoqing we can know that like destructive trickster so on has been certainly existed in the world of Chinese common people, although these elements are seldom found in Chinese written literature. We also continued to research other literature that consists of singing and talking like Baojuan 宝巻 or precious volumes and others, and published some papers.

研究分野：中国文学

キーワード：金華道情 口承文藝 語りもの 宝巻 宣巻

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 全般的状況 中国は他の多くの地域と同じように歴代、豊かな口承文藝の世界をもっていたと考えられる。しかし、ごく一部の例外を除き、それらのテキスト(ことば)が記録されることはなく、口承文藝をめぐる状況も、残された文字から知ることはむずかしい。

敦煌変文や宝巻から推測されるように、それらの中には文学として独自の価値をもちうる、魅力的な作品、あるいはそうした作品に育ちうるものがあつたに相違ない。じっさい、中国の文化史・文学史には、口承文藝の関与を想定してはじめて説明可能になることがらも少なくない。だから、口承文藝を無視して、中国の文学史・文化史を正しく理解することはできないと考えなくてはならないだろう。ただ、中国では口承文藝研究の価値が十分に認識されておらず、研究は、進んでいるとはいいがたい状況にある。

一方、現代中国に目を転じれば、各地で、今も口承文藝が命脈を保っている。たとえば、宝巻をうたい語る「宣巻」は、明代から、テキストや実演の状況を知らせる記録が残るとともに、現在もいくつかの地域において宗教儀礼や藝能として、人々の生活中に生きている。これらを調査することは、過去の口承文藝にかかわる文献の不足を補うものとなるにちがいない。社会の急速な変化によって、衰亡の危機にある口承文藝も多いから、その調査は急がなくてはならないだろう。

(2) 本研究グループの状況 こうした考えにもとづき、本研究グループは、2008年度から、3年ずつ計2回、科研費を受けて、口承文藝の実地調査を行なってきた。本グループの研究の基礎は、1990年代から、磯部祐子が浙江省の紹興において行なってきた、宝巻の調査にある。よって、実地調査は、紹興を拠点とし、あわせて、研究協力者の得られた浙江省の平湖においても実地調査を行なってきた。

これらの調査・研究をつうじ、直接観察しえた口承文藝について、そのテキストや実演状況にかかわる理解を、大いに進めることができた。とりわけ、紹興宣巻については、その社会的機能「孤魂の慰撫と免災」を明らかにし、これによって多くの疑問点が説明可能になった。

今回の科研費研究では、実地調査の拠点を、金華に置いた。これは、金華に研究協力者が得られたことによる。金華は、同じ浙江省でも内陸部にあり、沿岸部の紹興や平湖と異なる、新しい知見を多く得られることが期待された。内陸部とはいえ、金華は古くから拓けた交通の要衝で、全国的に知られる口承文藝を豊かにもっている。それは、地方伝統劇の「務-力+女、以下同」劇であり、民間伝承であり(金華の昔話はエバーハルトが「中国昔話類型」を作成するための基礎となった)また、語りもの「金華道情」である。

このうち、「金華道情」が、道情の「道」が道教に因むとされていること、藝能者の多くが盲人であることから、とくに関心を引きつけた。日本の平家語りや瞽女唄をはじめ、語りものを盲人が担ってきた例は多い。語りものについて、何かの普遍的な真実をまのあたりできることも期待された。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的 本研究の目的は、金華の口承文藝の実態を明らかにすることにあつた。金華の口承文藝とは、上記1-(2)に述べた、伝統地方劇「ブ劇」、民間伝承(昔話・伝説)と語りもの藝能「金華道情」とを、主として指す。焦点を定める必要があると考え、これらのうち、「金華道情」を中心に据えることにし、副題にそれを示した。

「金華道情」を選択したのは、この藝能が、本グループがこれまで調査してきた「宝巻」あるいは「宣巻」と同じ、うたと語りによる藝能だからである。しかし、一方で、宣巻はテキストにしたがって上演がなされるが、金華道情は、前述のように、主たる担い手が盲人であり、文字の干渉をあまり受けていない。こうした違いから、新しい知見が得られる可能性があつた。

(2) 本グループの目的 本グループは、上記2-(1)の本研究期間中の目的のほか、1-(1)に述べたように、長期的かつ大きな研究目的をもっている。金華の口承文藝についての理解を、中国の同時代の、また通時的な口承文藝の理解につなげ、さらには、中国文化史の理解の深化に貢献することが、それである。このことから、金華道情のみならず、これまで研究してきた宝巻や紹興宣巻についても、研究を継続した。

## 3. 研究の方法

本グループの研究方法上の特色は、文献調査と実地調査の両方を重視することにある。文献調査と実地調査は、相対立する手法であるかのようにとらえられることもあるが、わたしたちはそのような考えをとらず、文献調査と実地調査の結果を総合して考察することを行なってきた。

文献調査は、口承文藝のテキストの読解が中心となる。これについては、メンバーが各自で資料を収集し、各自で進めた。

実地調査は、主としてグループの活動として、3か年に7回行った。その目的は、テキストをとりまく状況を把握することであつた。具体的には、口承文藝の実演の観察・撮影、口承文藝の担い手(藝能者)への聞きとりを行なった。

実地調査には現地研究者や藝能者の協力が必須である。そこで、上記3種の口承文藝の比重のバランスについては、金華道情を中心とすることを予定しつつ、じっさいに遂行できた実地調査によって調整するところづもりをしていた。結果的には、金華道情において、代表的な藝能者をはじめとして現地の人々の協力を得ることができた。よって、副

題のとおり、調査も成果も金華道情が中心になった。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、3つに大別することができる。すなわち、(1)金華道情に関連する成果、(2)宝巻に関連する成果、(3)金華道情・宝巻以外の浙江の口承文藝に関連する成果、である。以下、この分類ごとに研究成果について説明する。

なお、今回の研究では、金華道情の実地調査を順調に行うことができたため、逆に、ブ劇と民間伝承については、成果を得るまでの調査を行なうことができなかった。唯一、磯部「宮廷本《天香慶節》的特点及对民間戯曲的影響」(学会発表)のみ、ブ劇にかかわる成果である。

##### (1) 金華道情に関連する成果

金華道情に関連する成果には、テキストの読解に比重をおいた磯部祐子「金華道情の一側面 呆女婿型と艶笑型」(雑誌論文)と、実地調査に比重をおいた松家裕子「金華道情調査報告・その一」「同・その二」(雑誌論文)がある。

前者は、副題に示すとおり、金華道情の「短篇」のうち、ばか婿の話である呆女婿型の作品と、エロティックな内容をもつ艶笑型の作品に注目し、金華方言を含むテキストを日本語に翻訳、あわせて分析を行ない、金華道情の笑話性と非宗教性を指摘した。

後者は、実地調査の詳細な報告である。「その一」の調査は、前科研費研究期間中に行ない、実演の観察や藝能者への聞き取り調査も含むが、ごく短時間である。金華道情にかかわる疑問を提出した、むしろ「前置き」というべき文章である。

これにたいし、「その二」は、金華道情を代表する藝能者である朱順根さんの全面的な協力を得て、長時間にわたって実演の観察・撮影と聞き取り調査を行なった成果である。各2日間で2回、計4日にわたって行なった調査は、1日を聴衆のある日として聴衆を含めて観察し、1日を聴衆のない日として藝能者に注意を集中した。

聴衆の熱心さから、人間は学校教育を経ずとも、声だけの藝能に、90分という長時間、しかも相当強く惹きつけられうることを確認した。

藝能者については、金華道情の至芸がいかなるものであるかを問のあたりにするとともに、盲人による物乞いの藝能といわれた金華道情の藝能者の、過去の苦難の生活を、ご本人や家族から直接知ることができた。それは、20世紀中国社会の一側面の特徴をよく示すと同時に、太古以来の基層の藝能者たちが、共通して経験してきたものでもあったろう。

朱順根さんには、すでに書き起こしのテキストのある演目の実演も依頼した。文字になったテキストは、あくまでも整理されたテキストにすぎず、口頭の世界は、より自由で豊

かなひろがりをもつことが確認できた。

実演とそのテキストについては、ひとつの誤算があった。調査で得られた動画からの書き起こしを現地の研究協力者に依頼したが、遂行されなかった。これは、この作業の困難さを認識していなかった、こちらに非があったのである。

よって金華道情の各演目の検討は、朱順根さんの口頭の解説と、すでに出版されたテキストによって行なうことになった。それでも、前者の『尼姑記』、後者の『皇涼傘』ともに、いわゆる中国の俗文学に見える作品とは、一線を画すものであった。脈絡の追求にはかならずしも熱心ではなく、ときに善悪を超越する。このほか、文字というフィルターを透過しにくい、エロティシズム 民間のあっけらかんとしたエロティシズム や破壊的なトリックスターといったものを、金華道情の中に見つけることができた。

##### (2) 宝巻に関連する成果

宝巻にかんしては、松家が『太平宝巻』(図書、雑誌論文 および学会発表)と『惜穀宝巻』(雑誌論文)、磯部が『花名宝巻』(雑誌論文)について、それぞれ作品研究を行ない、その成果を公表した。いずれの研究も、基礎作業として、数種のテキストの精読と校勘を行なった。一方で、とりわけ『太平宝巻』と『花名宝巻』は、いずれも紹興宣巻の重要な演目であり、実地調査によってそれぞれの機能がわかっている。『太平宝巻』は、横死した人の魂を慰め、それによって災いを免れるために演じられる。『花名宝巻』は、勧善の目的を強くもっている。

本グループの目指すところは、文献調査を実地調査と総合することによって、テキストをより正確に読み解き、宝巻の性格をより正しく把握するというところにある。これらの成果は、その方法の有効性を示したものだと言えるだろう。

宝巻に関連するもうひとつの成果、小南一郎「中国近世の宗教文藝」(雑誌論文)は、文献調査と実地調査を基礎としつつ、宝巻全体を見わたし、さらに古い時代の儺戯や盂蘭盆をも視野に入れ、中国文化史全体にかかわる問題を論じている。成果のうち「図書」の小南一郎『仏説大目連経校勘訳注稿』および小南一郎『「大目連経」と「目連救母経」目連救母伝承中の位置づけ』は、盂蘭盆の議論の基礎作業にあたる。この論文では、また、孤魂をキーワードとして中国近世の文学たとえば『水滸伝』を説明する試みもなされており、上記2-(2)の本研究グループの目的をよく体現した成果である。

##### (3) 金華道情・宝巻以外の浙江の口承文藝に関連する成果

本研究の研究協力者の手に成る要木(藤田)佳美「桐郷蚕歌について 養蚕地域の農村間芸能に関する基礎的研究」(雑誌論文)が、これにあたる。

要木(藤田)さんは、明清江南地区の社会

史の研究者であることから、研究協力者をお願いしており、本科研費の報告書のために、この文章を書きおろして下さった。蚕歌が日本で紹介されることはあまりなく、加えて歴史研究者の立場から、養蚕業にかんして詳細な解説がなされている。嘉興から湖州一帯の文化を知るうえで、たいへん有用な文章である。

以上、本研究の成果を説明した。なお、本研究グループは、科研費研究の成果を冊子体（紙ベース）の報告書として刊行してきた。本研究についても、本科研費研究と同タイトルの報告書を刊行し、そこには、雑誌論文を除くすべての成果を収録している。必要であれば、[matuka@otemon.ac.jp](mailto:matuka@otemon.ac.jp) に請求されたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

##### 〔雑誌論文〕(計7件)

松家 裕子、金華道情調査報告・その一  
二〇一五年八月・十一月、[シ+豊]  
浦鎮 朱順根 アジア学科年報、査読無、10(通巻31)、2017、44-77

要木(藤田) 佳美、桐郷蚕歌について  
養蚕地域の農村民間芸能に関する基礎的研究、浙江金華口承文藝研究 語りもの藝能「金華道情」を中心に、川西軽印刷、2017、140-170

松家 裕子、『惜穀宝巻』について 咸豊期一宝巻における文学と宗教、桃の会論集、査読無、7、2016、59-104

小南 一郎、中国近世の宗教文藝、国学院雑誌、査読有、117-11、2016、158-172

磯部 祐子、金華道情の一側面 呆女婿型と艶笑型、富山大学人文学部紀要、査読無、65、2016、83-121

松家 裕子、金華道情調査報告・その一  
二〇一二年三月・二〇一三年三月、アジア学科年報、査読無、9(通巻30)、2015、88-101

磯部 祐子、『花名宝巻』考、富山大学人文学部紀要、査読無、63、2015、105-124

松家 裕子、『太平宝巻』の六種文本兼論民間文本的価値、中国宝巻国際研究討会暨中国俗文学学会 2014 年会会議論文集、査読無、2014、322-345

##### 〔学会発表〕(計4件)

松家 裕子、『新宝巻』にみえる信仰のありかた 孤魂と免災、日本道教学会第67回大会、2016年11月12日、京都大学文学部

磯部 祐子、『宮廷本《天香慶節》的特点及対民間戯曲の影響』、Court Theater and Court Culture in the Qing Dynasty、2015年11月14日、Columbia

University, USA

松家 裕子、『紹興宣巻と『太平宝巻』』、中国文学会、2015年7月8日、京都大学文学部

松家 裕子、『《太平宝巻》の六種文本兼論民間文本的価値』、中国宝巻国際研究討会暨中国俗文学学会 2014 年会、2014年10月18日、中国江蘇省揚州市、石塔賓館・揚州大学

##### 〔図書〕(計4件)

松家 裕子、小南 一郎、磯部 祐子、要木(藤田) 佳美、『浙江金華口承文藝研究 語りもの藝能「金華道情」』を中心に、川西軽印刷、2017、170

王 定勇(主編)、唐 碧、尚 麗新、丘 慧瑩、松家 裕子他 21 名著、『中国宝巻国際研究討論会論文集』、2016年、広陵書社、325 \*雑誌論文 の修正版を掲載

小南 一郎、『「大目連經」と「目連救母經」』目連救母伝承中の位置づけ、アインズ、2015、22

小南 一郎、『伝説大目連經校勘訳注稿』、アインズ、2015、21

##### 〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

##### 〔その他〕

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

松家 裕子 (MATSUKA, Yuko)

追手門学院大学・国際教養学部・教授  
研究者番号：20215396

##### (2) 研究分担者

小南 一郎 (KOMINAMI, Ichiro)

泉屋博古館・館長

研究者番号：50027554

磯部 祐子 (ISOBE, Yuko)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：00161696

##### (3) 連携研究者

なし

##### (4) 研究協力者

要木(藤田) 佳美

(YOGI(FUJITA), Yoshimi)

鳥取大学非常勤講師

研究者番号：